

障害者の能力生かせ

企業や社会福祉法人



進和学園は作業工程や器具を工夫(平塚市)

神奈川県内の企業や事業所で、障害者の能力を引き出す動きが広がっている。社会福祉法人の進和学園(平塚市)は5日、障害者が働く食品工場を新設。作業工程や器具を工夫することで、障害者と同等の生産性を目指す。ファンケルは視覚障害者に目の不自由な人向け表示シールの開発に参画してもらう。

進和学園は、知的障害(「しんわろネッサンス」)者が働く「就労支援施設」(平塚市)に9100万

進和学園 専用器具で作業容易に ファンケル 弱視向け製品の助言役

円を投じ、食品加工工場を新設する。既存の施設の空きスペースに346平方メートルの作業場を設置、当初は10人程度が就労する。地元の農家からトマトなどを仕入れ、トマトジュースやトマトピューレ、ジャムなどを製造する。「湘南工房」のブランド名で販売し、5年で20〜30人体制に拡大し、年5000万円の売り上げを目指す。

同工場では障害者が作業をしやすいように、通常は包丁を使うトマトの芯を取り除く作業に専用の器具を導入。製造工程を細かく分けることで、複雑な作業を減らした。進和学園の久保守一男統括施設長は「1人で

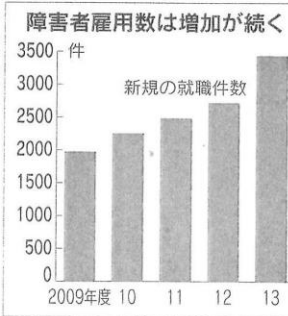
1人分の作業ができなくとも、個々人の長所を生かせば3人で3人分の作業ができる」と話す。

ファンケルは5月、目の不自由な人が化粧品の入った容器を区別できるように凹凸を付けた「タッチマークシール」を刷新した。指で触れてすぐに分かるように凹凸の部分を改良。弱視の人が見やすいようにシールを黒い縁取りし、文字を大きくした。視覚障害者の従業員3人をシールの改良チームに加え、具体的な助言や改善案などを取り入れた。

同社は1998年にタッチマークシールを導入。目の不自由な人が通販販売などで化粧品を注文すると、個別に容器にシールを貼り、使い方の音声ガイドと一緒に発送する。給与は健常者と同じだが、週20時間以上の勤務で可能とし、体調面なども配慮する。

製造派遣の日総工業(横浜市)の特例子会社で事務代行業や清掃などを手掛ける日総びゅう(同)は、障害者雇用のコンサルティング事業を昨秋から始めた。障害者雇用率が7割を超す同社のノウハウを他社に提供する。

障害者の雇用義務拡大



県内就労件数、13年度最高

神奈川県内の企業や事業所が障害者の「戦力化」を急ぐ背景には、障害者の雇用義務の範囲が広がる必要がある。

神奈川県労働局によると、13年度にハローワークを通じた県内の障害者の就労件数は3434件だった。前の年度に比べて26.5%増え、過去最高を更新した。ただ、障害者を戦力化していくには、働く環境の整備など課題も多い。障害者の就労が広がるなか、同局は「職場に定着してもらうために成功事例を共有することも重要だ」と指摘する。